



- ◇総会・地域づくりシンポジウムご案内/「地域P&C 養成塾」受講生募集
- ◇情報共有と広報活動 今西弘子(NAED 理事/地域P&C 第3期生)……2頁
- ◇奈良市総合交通戦略策定に加わって 大塚徹(NAED 理事/地域P&C 第1期生)……3頁
- ◇活動の近況報告 立松麻衣子(地域P&C 第5期生)……5頁
- ◇活動の近況報告 村上秀夫(NPO 法人山野草の里づくりの会理事長/地域P&C 第4期生)……6頁

総会・地域づくりシンポジウムご案内

一般社団法人地域づくり支援機構の総会と地域づくりシンポジウムを、下記のとおり開催いたします。NAED 会員の方々は、ぜひ、ご参加ください。また、ご友人・知人を地域づくりシンポジウムへお誘いください。

日時 2022年6月4日(土) 10:30～11:30 総会 13:10～16:30 地域づくりシンポジウム

会場 奈良県社会福祉総合センター 5階研修室B

地域づくりシンポジウム

テーマ「結ぶ 繋がる 廻る 環る 一起承環結 奈良ー」

地域住民が主体となり、地域のために奮起し、活動を起こし、そこから人の繋がりや縁が生まれ、それが次世代や他地域に継承され、豊かな地域の輪が広がり続けることをイメージしています。

- ①基調講演 北森義卿氏(深野〇〇会代表/地域づくり支援機構理事)
- ②クロストーク デイビッド カパララ氏(川上村地域支援員)×原田弘之氏(大阪成蹊大学教授)
- ③活動紹介 奈良フェニックス大学地域研究科「山添グループ」山添村広瀬地区の活力醸成
- ④活動発表 地域づくり支援機構「地域P&C 養成塾生」

参加費 地域づくりシンポジウム 1,000円(資料代)

申込み・問合せ info@naed.or.jp

「地域P&C 養成塾」受講生募集

第15期「地域P&C 養成塾」を下記のとおり開講いたします。地域づくりに必要な知識を得るとともに、常に問題意識をもち行動できる実践的なノウハウを習得します。また、持続可能な地域社会を実現するための地域づくり・人づくりを、地域づくりの現場から学ぶ機会を提供します。受講生を募集中です。

開講時期・開講数 2022年6月25日(土)～2023年6月3日(土) 全20回

会場 阿伽陀屋若林亭(橿原市今井町4-11-26/近鉄八木西口駅下車徒歩約10分)

定員 8名

受講料等 受講料 54,000円 資格認定試験料 6,000円

申込み・問合せ info@naed.or.jp TEL 090-1711-5240(若林) 090-3429-9814(神) 080-6122-2727(中辻)

情報共有と広報活動

今西弘子(NAED 理事/地域P&C 第3期生)

組織活動において、情報が共有されていることの重要性はご承知のことではあるが、平素の広報活動も情報共有における重要な役割を果たしている。

広報活動は、外部に対する自己や組織のPRと捉えられがちではあるが、ふだん活動に関わっていないメンバーや興味を持つ者にとっては、唯一の情報源となるからである。

(1)物の見方と捉え方

コップに注がれた水の多少についてはよく聞かれる例えであるが、ここではコップそのものの見方について考えてみよう。たいていのコップは、真上から見た時は円形であり、真横から見た時は四角形である。ひとつの同じ物体でも、見方によって全く異なる形であることに気づく。

今、世界中が震撼しているウクライナとロシアについても、それぞれの立場や都合で全く違った喧伝がなされている。虚実、善悪はさておき興味深い現象である。

(2)ターゲットの設定

誰に対して訴えたいのか、伝えたいのかによって、手段(ツール)を選別するのは当然のことであるが、表現方法、特に言葉や写真、画像、表や図形などを効果的に使用しなければ、その効力は発揮できず発信者の自己満足で終わってしまい、伝わらないことが多いと言える。

例えば、文字を羅列して思いを訴えても、興味を持たない対象者には手にとってさえ貰えないだろう。逆に、写真やイラストばかりでは、専門性や詳細を求める人には物足りない情報となる。

誰に働きかけるのか、ターゲットを先ず設定することが重要である。

(3)新しい生活様式での広報

新型コロナウイルスの出現によって対面での会話が難しくなり、井戸端会議やロコミなどの手法は使いづらくなっている。一方で、大容量データの通信が難しいADSLの時代ではなかなか普及しなかった、高速&大容量通信が可能な光通信が主流となっている今、遠隔地の人も高画質・高音質でやり取りができるようになり、インターネットを利用した会議や、コミュニケーションが盛んに利用されるようになった。

(4)情報難民を防ぐ内部広報

地域によっては、インターネットの普及が遅れていたり、高齢者などで活用できない人々が存在しているのを忘れてはならない。いわゆる情報難民である。このような人々にも同様の情報を届けるための手段に配慮が必要である。これには手間暇がかかり非常に効率の悪い作業となるが、切り捨てたり見捨てたりすることなく、根気よく工夫をしながら接していくことが肝要である。

(5)出会いと継続

人であれ、物やコトであれ、出会わなければ、知ることがなければ、それは存在していないのと同じである。その存在そのものが情報であり、それを知らしめる手段が広報活動である。その情報が共有され生かされることで、モチベーションが維持され活動が継続・発展していくのである。

先ずは、知ってもらうこと、理解を促すこと、この活動が地域づくりにおいて最も重要な活動であると考えている。

奈良市総合交通戦略策定に加わって

大塚徹 (NAED 理事 / 地域 P&C 第 1 期生)

今年 1 月に「奈良市総合交通戦略」が発表されました。私は地域 P&C の立場で奈良市地域公共交通会議の公募委員として策定議論に関わる機会がありましたので、その報告をします。「奈良市総合交通戦略」は奈良市のホームページ <https://www.city.nara.lg.jp/soshiki/172/134025.html> でご覧になれます。

1. 奈良市地域公共交通会議

奈良市ポイント事業をお手伝いしている関係から、奈良市の事業全般にも関心を持っていたところ、2017 年 8 月に、奈良市地域公共交通会議の公募委員募集のを知り、地域 P&C の知識・経験を活かせるのではないかと考え応募しました。応募書類に書いた小論文が評価されたのでしょうか、奈良市から委員の委嘱を受けました。

地域公共交通会議とは、人口減少や少子高齢化、人口の都市部集中と地方の過疎化など近年の公共交通を取り巻く社会の変化に伴い、地域ニーズに適合した乗合運送サービスのあり方について検討し、地域の公共交通計画を策定・実施する目的で、道路運送法にもとづき、市町村が主体となって設置する会議のことです。

奈良市地域公共交通会議は、奈良市副市長が会長を務め、近鉄や奈良交通などの公共交通事業者、道路管理者として国道事務所や警察、住民・利用者代表として自治会役員と私も含めた公募委員らで構成され、学識委員の一般社団法人グローバル交流推進機構理事長の土井勉先生が会議の議長を務められました(委員名簿も上記のホームページに掲載)。

2. 会議の経緯と異例の委員任期延長

会議では、奈良市の地域特性と公共交通の抱える異なる課題から、西北部・中部・東部の 3 つのゾーンに分けて議論を進めました。このゾーン分けは、「奈良市改訂都市計画マスタープラン」と同じゾーン分けです。

西北部の住宅街では高齢化が進み、マイカー利用が困難な方が増えることから、病院、スーパーマーケットなど生活の基盤となる施設や鉄道駅など幹線交通へのアクセスをどう確保するのかを中心に議論しました。

世界遺産の寺社をはじめ多くの観光資源を有する中部では、増加する一方の国内外からの観光客(2017～2019 年時点)の足としての公共交通と、中心市街地に住む地域住民の生活の足としての公共交通の両立を図るための議論を進めました。

柳生地区や旧都祁村・月ヶ瀬村などの東部の過疎地域では、地域住民の移動の自由の確保と公共交通の存続という切実な問題について議論を進めました。

こうして、約 2 年半の会議の成果として 2020 年 3 月に「奈良市総合交通戦略」が発表される予定で、パブリックコメントの手はずまで整えられていました。その直前になって出てきたのが新型コロナウイルスです。海外との往来は基本的になくなり、国内の移動も「ステイホーム」や「テレワーク」の影響で、観光客・通勤客ともに激減したため、今までの議論の土台となっていた交通需要の前提が根本から覆されました。

結局、90%以上でき上がっていた当時の「奈良市総合交通戦略」は一旦ご破算となり、ウイズコロナを見据えた内容の総合交通戦略を改めて作り直すこととなりました。

このため、当初 2017～2019 年度の 3 年の予定だった委員の任期が、2021 年度末(2022 年 3 月)まで、異例の 2 年間延長となったのです。

3. 地域 P&C の知識・経験を活かして

会議は延長期間を含めて計 9 回開催され、私も公募委員としてほぼ毎回意見を述べました。今般策定された奈良市総合交通戦略の中には、私の意見が反映されたものも 3 つほどあり、これには地域 P&C の知識・経験が役に立ちました。

①SDGs に貢献できる内容

これからの時代、SDGs に貢献できる内容でなければならないという意見を会議の席で述べただけでなく、奈良市都市政策課(当時、現・交通バリアフリー推進課)に公共交通とSDGs との関係について説明に行きました。その結果、以下のようなSDGs のゴールとの関係が示され、「自由で安全に出かけられ、多くの交流が生まれる、住み続けたいと思えるまちづくり」という「本戦略の目指すべき交通体系の将来像」が定められた訳です。

「安全に(病院などに)外出できることで → 13.すべての人に健康と福祉を」

「観光・消費が高まることで → 8.働きがいも経済成長も」

「新駅ができることで → 9.産業と技術革新の基盤をつくろう」

「駅周辺の利便性が高まることで → 11.住み続けられるまちづくりを」

「マイカーから公共交通に転換することで → 13.気候変動に具体的な対策を」

「新たな交流が生まれることで → 17.パートナーシップで目標を達成しよう」

②シェアサイクルも公共交通のひとつに

ヨーロッパを中心に、CO₂削減を目的にマイカーに代わる交通手段として利用されているのがシェアサイクルです。これを国内外から奈良を訪れる観光客に積極的に利用してもらい、CO₂削減とともに、中心市街地の交通渋滞緩和に役立てたらよいという意見を述べさせてもらいました。この意見には、グローバル交流推進機構の土井先生にも賛同していただき、今回の総合交通戦略ではシェアサイクルも公共交通のひとつに位置づけて、その後の議論が進められ、特に中部地域では「シェアサイクルも含めた公共交通の総合展開で、『車』中心から『ひと』中心の社会への実現」を目指していくこととなりました。

※シェアサイクル:自転車借りたお店にまた返さなければならないレンタサイクルに比べ、指定されたポートであれば、どこで借りてどこに返してもよい利便性の高い新しい自転車移動手段。現在奈良市ではドコモのグループ会社が運営している。

③東部の議論は地域住民の声を聞いて

東部の過疎地域では、買い物難民や通院難民などの交通弱者の問題解決が喫緊の課題となっています。一方、従来の路線バスでは赤字が増え続け、行政からの補助金で路線を維持しているのが実情で、現在の交通体系のままでは早晚行き詰ります。

このため、東部地域には代替の公共交通の導入が不可欠(旧・都祁村地区では村から引き継いだコミュニティバスがすでに運行している。)ですが、地域住民のニーズに合ったものでなければ、いわゆる“空気を運んでいる”状態になってしまいます。私は地域住民の声を反映させた公共交通の姿が望ましい旨の意見を述べました。

その辺のことは、奈良市の担当者も十分に承知されており、2021年度後半に「東部の交通を考える意見交換会」が2回、「地区別ヒアリング」が6ヶ所で開催されました。

こうして地域住民の意見を反映させた形で、2022年3月にコミュニティバスの実証運行が実施され、利用者のアンケート結果も踏まえて、より利便性が高く、財政負担の少ない形態の公共交通を導入していく運びとなっています。

4. おわりに

今期の奈良市地域公共交通会議は「奈良市総合交通戦略」の策定で一区切りですが、これで奈良市の公共交通課題が解決できたわけではありません。公共交通事業者はコロナ禍により経営の悪化が続いています。特に市内のバス路線の改変は必至ですが、地域住民の交通サービスを極力低下させない方向での検討や、東部地域の路線バスに代わる公共交通サービスの利便性確保の検討など、積み残されたままの課題が多くあります。

奈良市地域公共交通会議は今後も続けられるそうです。次期も公募委員の募集があれば応募したいと考えています。地域P&Cの知識・経験を活かせるだけでなく、会議の議論から新たな情報に接し、多くの刺激を受けて、私自身の勉強にもなるからです。

活動の近況報告

立松麻衣子(地域P&C 第5期生)

「できること」「やりたいこと」「今まで大切にしてきたこと」をサポートするような高齢者ケアを目指して、高齢者の居住環境整備について研究しています。

◇『地域居住の視点から高齢期の居住環境を考える』<https://www.nara-edu.ac.jp/assets/tatematsu.pdf>

一方で、学生とは卒業研究テーマについてディスカッションをします。最近では、子どもに関することとしては、校区外の学校に通う児童生徒や、発達障害児、トランスジェンダー、外国にルーツを持つ子どもなどを対象にして、彼らが安心して学習できるような環境について学生と一緒に考えました。子どもの生活環境だけではなく、地藏盆や近代遊郭建物、みかん農業のある地域などをフィールドにして、まちについて考えることもありました。学生の卒業研究を大学紀要として発表したものは以下です。

◇『市町村による福祉避難所指定を受けた県立特別支援学校の防災管理の現状と課題』

https://nara-edu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=13210&item_no=1&page_id=13&block_id=21

◇『教員養成大学における防災教育の効果的な学習方法』

https://nara-edu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=13226&item_no=1&page_id=13&block_id=21

◇『奈良市における学童保育昼食提供事業所の現状と事業継続の課題』

https://nara-edu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=13324&item_no=1&page_id=13&block_id=21

◇『奈良県における小規模特認校制度の充実に向けた事例的研究』

https://nara-edu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=13559&item_no=1&page_id=13&block_id=21

学生と一緒に考えるテーマは「地域」がキーワードになっています。広く地域福祉の要素が入っています。科学研究の手法でアプローチしていきます。学生と一緒にディスカッションをしていると、彼らは「地域」という視点をまだ十分に持つことができていないことがわかります。大学生の多くはまだ自分を中心にした世界観のなかにいるのだらうと思います。だから、地域を認識していない。そのような学生の無意識から生まれる疑問や発想は、私の想像を超えることがあります。見逃していたり当然と思いついでいたりすることに気づかされ、ハッとしたり清々しい気持ちになったりします。さらに、学生が様々な人と関わりながら卒業研究を進める過程で、殻を破って雛が孵るような成長をする様子を見ることができます。

研究を通して思考が鍛えられて心が肥えていく。これほどもおもしろいです。

活動の近況報告

村上秀夫(NPO 法人山野草の里づくりの会理事長／地域 P&C 第4期生)

桜井市の東北部、大和川本流源流地域で大和高原の一角にある三谷「山野草の里」における最近の活動状況を報告します。2020年から新型コロナウイルス感染症の拡大が始まり、一般募集のイベントは2年間自粛が続いています。

1. クロガリの整備

クロガリとは、農地に隣接した山の土手で農地から約5mの高さまでの部分のことで、農地所有者に管理義務があります。急傾斜地ですが、冬の間草刈りを行うことで、手入れされた里山の景観が生まれ、春からは山菜や山野草の宝庫になります。



イベントの自粛によって、会員スタッフ(土曜日は10人余り、水曜日は10人足らず)は、保全活動に専念できました。クロガリ整備は、笹等を手鎌で刈り取る作業でしたが、電動のトリマーを使用してみるとスピーディーかつ均一に刈り取ることができ

ました。さらに、クロガリ整備した後は、杭を打ち竹で土留めし崩落防止にも取り組み始めました。

○棚田の復活



大和川の源流地域であり、「山野草の里」の園内に流れる小川を遡っていくと湧き水です。この辺り一帯は数十年間放置されていますが、この20年間の取り組みでここまで整備が進みました。最近

は、「山野草の里の棚田を復活させよう！」を合言葉にしています。この5月初めの田植えでは、この源流域の葦の原を整備した水田、約380㎡が何十年ぶりかで復活します。うるち米「ヒトメボレ」を栽培し、秋には美味しいお米を食べるつもりです。

○果樹園の再生活用



この数年、よく議論しているのは、三谷集落から管理を任された果樹園への対応です。果樹栽培が上手くいかず、奈良県の中中部農林振興事務所の専門の方に相談したところ、「数百年間水田であった場所を果樹園にするのは困難。1m下を水が流れている。果樹ではなく水に強い景観植物を植えるか、別の活用を考えるように」と提案されています。草刈りを続けながら、どうしていか皆で模索しているところです。

○三谷の道路掃除



三谷では、「人足(にんそく)」と言っていますが、年数回、村一斉に草刈りをされます。本会から参加を申し出て、本会の担当箇所が決まりました。2021年春から三谷のメインストリートとも言える道路(菅原神社前から上)の掃除、溝の掃除を本会が受け持つようになりました。3ヵ月に1回程度、活

動日に道路の掃除に取り組んでいます。また、本会の機関紙の「里だより」を毎月配布し活動状況をお知らせしています。

このほか、里山林の整備、ビオトープ活動等も、取り組んでいきたい活動です。これらの取り組みをつないで里山自然探索のコースができれば良いと思っています。楽しい活動をモットーに、続けていきたいと思っています。今後とも、ご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。